

本報告書の要約

第1章 大学入学までの実態

第1節 高校での学習と生活について

大学入学までに経験したこと

大学入学までに経験したこととして「浪人をした」が17.7%と最も多く、性別では男子、学部系統別では「保健その他」で浪人経験者が多い結果となった。一方で「他の高等教育機関（他の大学・短大、専門学校など）に入学した」「海外留学した」など、大学への編入学や高校時代の留学経験はわずかであった。

卒業した高校について

卒業した高校の卒業後の進路状況は、「国公立大学や難関私立大学への進学者が多い」「中堅レベルの大学への進学者が多い」の比率が高く、いわゆる「進学校」に在籍していた比率が高かった。また、卒業した高校の特徴についてたずねたところ、「学校行事では生徒が率先して行っていた」「卒業後の進路選択について、学校からの積極的なすすめがあった」に「あてはまる」と回答した比率が半数を超えた。

高校生活で力を入れていたこと

高校生活で力を入れていたことを平均すると、「勉強」3.6割、「友だちとの交遊」2.5割、「部活動」2.4割、「アルバイト」0.4割、「その他」1.1割であった。また1割以下とする回答が「アルバイト」91.1%、「部活動」44.0%であった。大学進学者において、高校生活での「アルバイト」はほとんど経験がないこと、また部活動の参加状況に学生間で差があることが確認できる。

高校での学習の様子

高校での学習の様子についてたずねたところ、男子に比べ女子のほうが授業に積極的に取り組んでいたことがうかがえる。また学部系統別の「保健その他」では、高校の学習において計画的な学習や勉強方法の工夫などに積極的に取り組んでいたことが確認できる。

高校での「総合的な学習の時間」などへの取り組み

高校のときの「総合的な学習の時間」やテーマ学習で、半数以上の大学生がインターネットや図書館を利用してあるテーマについて調べ、その結果について話し合い、文章にまとめるといった取り組みを体験している。しかし「調べたことを図や表にまとめた」「調べたことを人前で発表した」など、人前での発表を想定した取り組みは、「調べて文章にまとめた」よりもやや少ない結果となった。

高校での学習時間

高校1・2年生のときの平日の学校外の学習時間は「ほとんどしなかった」が29.9%と最も多く、「1時間」までを含めると63.5%であり、高校1・2年生のときにほとんど勉強時間を確保していなかったことが確認できる。しかし出身高校種別の「私立・中高一貫」や学部系統別の「保健その他」「教育」では、高校1・2年生段階から学習時間を確保していた傾向がみられる。

授業以外での学習機会

高校1・2年生段階では「どれもあてはまらない」が37.9%と最も多く、次いで「夏休みなどの長期の休みに、学校が行う補習授業を受けた」「朝や放課後に、学校が行う補習授業を受けた」が多い。一方、3年生段階では1・2年生段階から利用していた学校が提供する学習機会に加えて、予備校・学習塾の利用も増加し、その傾向は学部系統別の「保健その他」で顕著である。

第2節 大学進学までの受験について

受験経験（中学受験・高校受験）

中学受験を経験した大学生は全体の18.8%、高校受験率は全体の86.3%であった。受験後の進路は、「第一志望に合格し、進学した」者が最も多く、中学受験経験者の60.8%、高校受験経験者の78.5%が該当していた。

大学進学を意識し始めた時期・受験対策を始めた時期

大学進学を意識し始めた時期は、「高校2年生の頃」（29.5%）が最も多く、次いで「高校3年生の頃」「高校1年生の頃」となっていた。大学受験対策を始めた時期は、全体としては「高校3年生」（55.6%）が過半数を占めていたが、学部系統によって大きな差異もみられた。

大学受験対策

「受験期の学習時間」の平均は4.5時間であった。しかし、「0時間」（6.1%）、「1時間」（9.0%）など、実質的には受験勉強をしていると思えない回答もみられた。「大学受験対策として取り組んだこと」は、従来型の教科学習が多くみられた一方、「推薦・AO入試」による入学者を中心に、「小論文の準備」「面接の準備」「志望理由書・自己推薦書作成」などの対策に取り組んだ者も少なからずみられた。こうした傾向には、学部系統による差異もみられた。

受験する大学・学部決定の際に重視した点

受験する大学・学部を決める際に重視した点は、「興味のある学問分野があること」が64.8%と最も多かった。つづいて、「入試難易度が自分に合っていること」「自宅から通えること」「入試方式が自分に合っていること」など、自分自身が置かれている現状を重視して決定した者が多く、「先生、親、先輩といった他者のすすめ」を重視して決定した者は少数であった。これらの傾向には、性別や学部系統による差異もみられた。

大学受験のときの入試方法

大学受験時には、過半数以上の大学生が「一般入試」（70.2%）、「センター入試」（58.5%）を経験していた。その一方、「推薦入試」（26.8%）、「AO入試」（8.4%）といった、特別選抜入試を経験した大学生も少なからずみられた。「現在の大学・学部を受験した方法」に目を向けると、「一般入試」（56.4%）が最も多く、次いで「推薦入試」「センター入試」「AO入試」の順であった。こうした傾向には性別による差異がみられた。

進学先の大学・学部決定時期

「現在の大学・学部合格した時期」は、国公立大学や多くの私立大学の一般選抜入試の結果が明らかになる「2月」(33.3%)や「3月」(35.5%)と回答した者が多数を占めていた。しかしその一方、一般選抜入試が実施される前の時期である、高校3年生の秋期(9月～12月)の段階で、現在の大学・学部への合格がすでに決定していた大学生も、全体の4分の1以上に及んでいた。こうした傾向には、文系・理系といった学部系統によって差異がみられた。

第2章 大学生活について

第1節 大学生の生活経験と適応意識

大学志望度と満足度

現在の大学・学部に進学したときの気持ちについてたずねたところ、およそ8割の学生は肯定的な気持ちを抱えていることが確認できる。また大学満足度は、「施設・設備」に関するハード面で最も高く(76.0%)、「授業・教育システム」「進路支援の体制」に関するソフト面で最も低い(ともに49.5%)ことが確認された。

入学以降力を入れてきた活動

入学以降どのような活動に力を入れてきたのかについてたずねたところ、「趣味」(67.8%)や「アルバイト」(52.7%)などの正課外活動に力を入れている学生が多くみられた。学部系統別では、「人文科学」の学生は授業中心の概して真面目な学生気質が、「教育」の学生は正課・正課外のあらゆる側面で積極的に活動に取り組んでいる様子が見られた。

大学での適応度

学内での転学部・転学科や他大学への編入学・再入学の希望頻度についてたずねたところ、後者については45.7%もの学生が意識して学生生活を送っていることが確認された。適応度と大学志望度との関連は明らかであるが、入試難易度との関連は必ずしも明確ではなかった。入学前の目的意識の明確化とそれに則した進学準備の必要性が確認された。

第2節 大学生の生活実態

1週間を通しての通学日数、大学で過ごす時間

大学生の1週間を通しての通学日数の平均は4.4日で、また1週間を通して大学で過ごす時間の平均は25.1時間、通学日数の平均で割ると1日あたり5.7時間過ごしているという結果になった。また学年が進むにつれて通学日数・大学で過ごす時間ともに減少する傾向がみられた。

大学で過ごす時間の内訳

大学で過ごす時間の内訳をみると「授業などへの出席」が5.8割と最も多く、次いで「友人との会話や交流など」1.6割、「図書室や研究室などでの自習」1.3割、「大学構内でのサークルや部活動」1.0割、「その他」0.4割であった。

サークルや部活動への参加状況

サークルや部活動への参加状況は「参加している」が49.0%、「以前は参加していたが辞めた」22.5%、「参加していない」28.5%であった。1週間あたりの参加日数をみると、1週間あたり2日以下の割合がほぼ6割であった。

アルバイトの実施状況

アルバイトを実施している大学生は63.7%であり、1週間あたりの実施日数の平均は2.9日、実施時間は14.3時間であった。学部系統別にみると「保健その他」「農水産」で、1週間あたりのアルバイト実施時間が全体の平均に比べ3時間前後少ない結果となった。

大学以外での時間の過ごし方

大学以外での1週間の過ごし方をみると、「授業の予復習や課題をやる時間」は「0時間」が20.2%、「1時間未満」が28.5%であり、ほぼ半数が週に1時間未満であった。同様に「大学の授業以外の自主的な勉強」でみると約6割が1時間未満であり、総じて大学以外での学習時間が確保されていないことが確認できる。

居住形態、通学時間

居住形態では「自宅」が58.1%と最も多く、次いで「一人暮らし」37.1%、「大学の寮」2.3%、「大学以外の寮」0.9%であった。また大学への通学時間（片道）の平均は55.8分であるが、居住形態別にみると「自宅」77.2分、「一人暮らし」24.8分であり、その差は52.4分であった。

大学生の1ヵ月の収入

大学生の1ヵ月の総収入の平均は8.4万円であった。居住形態別でみると、「自宅」が6.5万円、「一人暮らし」が11.3万円と両者の間で5万円程度の差がみられた。なお「奨学金」の支給を受けていない大学生が7割を超えている。

第3章 大学での学習

第1節 大学生の学習状況

授業への出席状況

大学生の授業への出席率は平均して8.7割と高い。学年の上昇とともに出席率は下がり、理系や職業資格と直結した学部で出席率が高いのに対して「社会科学」では低く、また男子よりも女子のほうが高い傾向がみられた。

大学教育に対する選好

7割を超える大学生が基礎・基本が中心の授業を望み、約6割が幅広い領域にわたって自由に履修し、授業を通してやりたいことをみつけるのが望ましいと考えている。大学教育に対する考え方は、「教育」「保健その他」「人文科学」の学部系統で特徴的な傾向がみられ、学生が専攻する学問分野の特性とかかわっていると考えられる。

大学での授業への取り組み

7割以上の大学生が授業に臨むにあたり基本的な学習姿勢を身につけているが、授業外では自主的に勉強する学生とそうでない学生とに二分している。授業の予習・復習をする学生は約3分の1である。こうした授業への取り組みについては、性別、学年別、学部系統別によっていくつか特徴がみられ、なかでも学部系統別の違いが顕著であった。

定期試験・レポートの準備期間

学期末の定期試験とレポートの準備期間については、性別や学年によってはほとんど違いがみられず、およそ半数の大学生が1～2週間前に準備を始めている。学部系統別で見ると、「保健その他」では定期試験の準備に早くとりかかる学生が多く、「教育」はその逆の傾向にあった。

授業の経験

これまでの授業の経験をたずねたところ、毎回コメントを課す授業や少人数の演習形式の授業が6割を超え、グループワークやディスカッション、教員と学生とのコミュニケーションの機会などを取り入れた授業はおよそ半数にのぼった。少なからず、学生の主体的な参加を促す双方向型授業が工夫されていることが明らかになった。

成績

大学の成績については、「優・良・可」のみで回答した学生（62.8%）が、「GPA」を記載した学生（37.2%）をはるかに上回った。「優・良・可」方式では平均して「優（A）」が4.7割を占め、「GPA」方式では平均値は2.7であった。

第2節 大学での学習成果

大学生は授業以外の諸活動も含めて、大学でどのような力を身につけることができているのかについて分析した結果、基本的なコンピュータ・リテラシーや専門分野の基礎知識、持続的学習態度の修得で高い成果を上げていることや、「ことば」を介した授業方法が学生に対して高い学習成果をもたらしていることが確認された。

第4章 大学卒業後の進路

大学卒業後の進路の検討状況

大学4年生の10月時点で、大学卒業後の進路が決定・内定している者は全体の71.6%にすぎず、「準備・活動にさえ至らない学生」も1割程度存在していた。「大学卒業後の進路を検討し始めた時期」に目を向けると、大学卒業後の進路を考えている学生のうち、大学入学前にすでに検討し始めていた者は36.9%であったが、大学入学後に検討し始めた者は63.1%に及んでいた。

大学卒業後の進路に対する活動

卒業後の進路について、何らかの検討を行っている大学生の「大学卒業後の希望進路」は、「民間企業」(61.1%)、「進学」(14.8%)、「公務員」(12.7%)、「教員」(5.0%)の順に多くみられた。「大学卒業後の進路に向けた準備・活動(予定含む)」は、大学3年生の時期から行う学生が65.1%を占めていた。しかし、「保健その他」など大学院進学者が多いような学部系統では、大学4年生の時期となることも示された。

第5章 大学生の意識

大学生の社会観と就労観

大学生がどのような社会観・就労観あるいは自己認識を持っているのかをたずねたところ、現在の日本社会は「競争が激しいうえに努力しても報われるとは限らない」という厳しい現状認識を持っていること、「授業に限らず大学で学んだことは、将来役に立つ」と認識していること、自分自身をあまり積極的ではないと判断していることなどが見出された。

保護者との関係

約6割の大学生が、なにごとにも自分で決めることが多く、困ったことは自分で解決すると回答したが、約4割の大学生は、保護者のアドバイスに従うことが多く、困ったときには保護者が助けると回答した。